

A君とわたし

わたしは、小さい頃、明るくふるまい、誰からも好かれるA君と気が合っ
てよく遊んだ。一緒にお風呂に入ったこともあり、今もA君と会うと、思い
出話をよくする。

わたしは子どもなりに、周囲の会話からA君が同和地区出身であることを
いつしか知ったが、大人達の雰囲気の中にふれてはいけない何かを感じてい
た。当時、A君自身が同和地区出身であるということを知っていたのかどう
かはわからないが、A君もこのことを話題にしたことはなかった。いつも一
緒にいることが多かったのに…。そして、今もこのことは変わらない。

わたしは、地域で行われる同和教育の研修会に、「同和問題のことは理解
しているし、A君とも親しくつきあっている。わたしには関係ないことだ。」
という考えがあり、ほとんど参加してこなかった。

ところが、一昨年春、この地域で悪質な同和問題に関わる差別事象が起
きた。各家庭から必ず1人は出席するようとの連絡で久しぶりに学習会に
参加した。この時わたしは、いまだにある部落差別に対する憤りを感じなが
ら、今は他の地域で暮らすA君のことを思い出していた。

A君には、この差別事象がどのように伝わっているのだろう。A君はどん
な思いでこの事象を聞くのだろう。わたしとA君は本当に親しい間柄である
と思っていたが、同和問題について触れずにつきあってきている。もしも、
A君が出身について知っているとしたら、幼い頃からわたしと明るく話して
いるなかで、どんな思いがあったのだろう…。わたしは今の今まで、A君の
思いを考えたことがなかった。わたしたちの親しさとは本物なのだろうか。

わたしは、学習会の内容はほとんど覚えていない。学習会の間、ずっとわ
たしとA君との関係を自分自身に問い返していたからだ。そして、今度A君
と会う時は、同和問題について語り合いたいと思うようになっている。